

関西 KANSAI 近代化遺産 Heritage of Industrial Modernization 紀行 [第7回] Junichi Shimomura

下村 純一（しもむら・じゅんいち）
写真家、早稲田大学・武蔵野美術大学
講師。1952年東京生まれ。早稲田大学
第一文学部で美術史を学んだ後、フリー
の写真家となり、ヨーロッパの近代建
築の取材、評論活動などをはじめ。主
な著書は、『織りなされた壁』（グラフィ
ック社）、『不思議な建築』（講談社現代
新書）、『アール・ヌーヴォーの邸宅』（小
学館）、『銭湯からガウディまで』（クレオ）、
『感性のモダニズム』（学芸出版社）など。



淀屋橋駅の地上出入り口。上屋は変わっているが、カーブを描く階段は、ホームのヴォールト天井に結びつく、オリジナルの形状ではなからうか

増設された2階デッキへの階段から見た淀屋橋駅のホーム。開通時は路面電車のような1両編成の車両であったというから、最初から驚くほどのゆとりをもってホーム空間は開かれていたことになる

写真・文 下村純一

懐の深い、地下の人工大空間

■開業時からの面影を残す大阪市営地下鉄駅

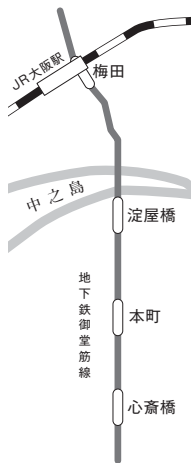
■大阪市営地下鉄駅(大阪府)
大阪市交通局が運営している大阪市営地下鉄は昭和8(1933)年に日本初の公営地下鉄として御堂筋線の梅田~心斎橋間が開業した。現在は8路線(1~8号線)が開通しているが、最初の路線であった梅田・淀屋橋・本町・心斎橋の各駅は、その後の改修を経ながらも開業当時の面影を残している。特に淀屋橋と心斎橋の両駅は、プラットホームの範囲が広がってはいるが、基本的に開通された当時のホームがそのまま使用されている。





路線も含めて昭和5 (1930) 年着工の地下トンネルは、開削工法で造られた。
軟弱地盤の土留めに、ドイツの鋼板や機械を導入するなど、大変な難工事であったという

ステンレス製の通風口。ホーム空間のオブジェともなっている



階段手摺りの壁をずっと守り続けているタイル。当初は、天井や壁などにタイルは多用されていたと思われる



淀屋橋駅のデッキ下にそとに残されていた百葉箱。今も参考データとしての測定を行っているというが、このホームのいわば歴史の生き証人だ



心斎橋駅ホームの照明は、数十本の蛍光灯を菊の花びらのように並べてある。繁華街の玄関口にふさわしい艶やかな「シャンデリア」である

初めて大阪の地下鉄に乗ったのは、30年以上も前である。時期も駅名も覚えてはいない。しかし、まるでドームにでも入ったかと錯覚したホームの印象は、強烈に頭に焼き付いた。

その頃の東京の地下鉄は、今と違い車両は小さくエアコンは無く、轟音を響かせて走るなど快適さにはほど遠い乗り物だった。殊に東京で最初に開通した銀座線はひどかった。車両と同じ位に狭さを感じさせるホームには、リベット留めの鉄骨柱が林立して、息苦しいだけでなく、何やら工場を歩く気分にも陥ったものだった。そのためか、あの頃の私は地下鉄が嫌でしかたなかった。ところが大阪では、まるで様子が違った。車両の何倍もあるうかという広いホームを、それを上回る幅で高いヴォールト状の天井が覆っていた。柱は一本も見当たらない。『何だ、このドーンとした広がり』と、驚きを通り越して衝撃に近い感動を味わった。

そんな想い出のある地下鉄御堂筋線のホームを改めて取材した。昭和8(1933)年に最初に開通した御堂筋線4駅のうちの淀屋橋と心斎橋の2駅を選んだ。

両駅とも壮大なヴォールト天井を張るホーム空間である点は、当初のままである。当時とは比べることもできないほど人の乗降が激しくなっているはずなのに、今もホームの印象はゆったりとしている。交通機関は単に人の輸送手段であつてはならないとも言いたげな、このホームのゆとりは貴重だ。

当初からもっとも大きく変わった点は、

淀屋橋駅の2階通路デッキであろう。増えた人をさばく新しい階段を設けるために造られたものだが、柱の一本も立っていない懐の深い大空間だからこそ、地下鉄ホームに2階を増設するなどという大胆な改修が可能だったと思われる。床、天井、壁は時に応じて変えられてきたように見受けられたが、随分と古そうなものを見つけた。当初からあつたとも思えないが、太くどつしりと聳え立つステンレス製の通風口、同じくステンレス製の細いアナウンス塔、階段手摺りに張られた淡い色彩のタイル、駅ごとに形を違えたシャンデリア然とした照明など。予想もつかなかったものでは、百葉箱だ。昔はこれで気温や湿度をチェックしては送風量を調節していたのではあるまいか。こうした今では他の代替品に変えられているようなものでさえ邪魔物扱いされず、このホームにはある。

巨大ヴォールト天井下に開かれたこれらの駅は、80年を越える自らの歴史を語るものたちを残しつつ、さらにこれから先、何十年も人の乗降を見ていくのだろう。



心斎橋駅ホームにスックと立つアナウンス塔。頂部にはめ込まれたスピーカーが、いかにも年代物